忠臣蔵の裏表

第二回

講談師　一龍斎貞花

悪いとなると寄ってたかって叩く。それがわずかな事でも、叩かれる方はたまったものでない。企業も個人も注意しなければいけない。評判とは恐ろしいもので存続にかかわることがあります。

吉良上野介が、浅野内匠頭を憎んだ原因の一つ。

男色の遺恨

内匠頭の家来に、比々谷右近という若衆姿江戸第一と言われる美少年がいた。ある時長矩のもとを訪れた上野介が、

「なんとも、無理なお願いでござるが、御家来比々谷右近を給わりたい。情けを加えて召使いとうござる」

と、所望したところ長矩が、

「右近には、ちと仔細あって手離しがたい。右近二・三歳の時父母に別れ、孤児となっていたのを世話してようやく今年十三歳。ご所望お許し願いたい」

と、断った。ところが後日、長矩は、老中堀田筑前守から、右近を所望されるや、あっさりと渡してしまった。

老中という役職の手前断れなかったのかもしれない。後日上野介が堀田家を訪れると、堀田候が自慢気に右近に酌をさせているのを見て、

「わしには断りながら、なんということか、おのれ！」

男色のあった当時のこと、こんなことがあったのかもしれない。

お芝居仮名手本忠臣蔵では、大序の鎌倉鶴ヶ岡八幡宮での兜改めの折、塩治判官（内匠頭）の妻顔世御前に、高師直（上野介）が横恋慕したものの、ふられたため頭にきて塩治判官に冷たい仕打ちをしたのが発端。

大石内蔵助が、比丘尼買いをしたとか、吉原で大老の柳沢吉保とばったり出会ったとか。

大石が遊んだ一番有名なのが祇園の一力。ところが文献にはないそうで、一力茶屋の名が初めて出てきたのが、義士討入り後四十六年たって初演された「仮名手本忠臣蔵」（武田出雲作）の七段目がはじめてで、一力は新しい茶屋で当時は無かったという。一番よく遊んだのが、伏見の植木町で安女郎のいるところだったとも。

元禄十五年妻のりくや子供を、但馬豊岡の実家へ帰してから、女遊びが激しくなり、そこで一族の者が心配して遊女のお軽を妾にし、やがてお軽が女の子を産んだという。

女性の噂多い大石、美男子（びなんし）だったかというと、傍系の大石家の記録には、小柄でやせ型の貧相な男だったという。親戚の内蔵助が大働きをしたので、やっかみから貧相と書いたんじゃないかと思いたくなる。

どんどん英雄化されたのかもしれないが、裏表を調べていくと、冗談じゃない大石は英雄だと反論したくなります。事実はこうだったという歴史家がいるが、自分をアピールするために逆説を唱えたりする。上杉謙信は女だったという小説家もいました。

上野介の事績の、黄金堤などは現存しており事実です。

歌の遺恨

上野介の所領千八百石の下野国（栃木県）稲葉の里で、巡礼の母と娘が大雪の中凍死、村人が亡骸をそこへ埋め二本の松を植え、後年母親の松が倒れんとしたのを娘の松が支えた。子が親を助けているかのよう。そこで村人が親孝行の松と碑を建てる時に、上野介が詠んだ歌、

〝心ある人にみせばや下野の
稲葉の里の親抱きの松〟

ある茶会の席で上野介がこの話を。居合わせた三人の大名は、「お見事な歌」と誉めそやした。ところが内匠頭が、「心ある者ならば親孝行の心がありましょう。不孝者の手本とするならば、西行法師のお歌にも、

〝心なき身にも哀れは知られけり
鴫たつ沢の秋の夕暮れ〟

とあり、頭の五文字を「心なきとお改めがよろしいかと存じます」

三人の大名上野介に憎まれるのも忘れて「成程ご尤も、内匠頭殿はご若年ながら大したもの」と、誉めてしまった。人の前で恥をかかされた上野介、「おのれ、よくも人の面前で恥をかかしたな。なにかあったらこの仕返しを」と恨みを持ったという話も。

これも事実はわからぬが、うまく話をこさえたとも。

マ、なんにしても人の間違いを指摘するのは注意が肝心。お得意様だったら完全にアウト間違いなし。「どんな教育をしているんだ」と。上役にもとばっちりがありましょう。口は災いの元、ご用心、ご用心。

定説、つけ届けの間違い

元禄十四年勅使饗応役を命ぜられた浅野内匠頭。饗応役に接待の作法を教えるのが吉良上野介。内匠頭は、

当時贈り物の決りの白扇一本に鰹節一連しか持参しなかった。相役の伊達左京亮は決りの他に白銀百枚を贈ってよろしくと頼んだ。

バブル全盛期で、つけ届がエスカレートしていた。柳沢吉保の玄関番は受けなれていて、鯛の篭の下には金、氷砂糖の箱の下には銀が入っていて持ち上げただけで幾ら位か判ったという。ある時、人形ですと大きな箱が贈られてきた。柳沢がふたを取ると若い女性が歩き出したという。これは吉保を悪い奴と思わせるための作り話でしょう。

家老の大石が、「主人が気が利かなければ江戸家老が気を利かせて贈るべき。殿様に内緒で贈ればいいのに」と、言っている。ある大名が贈らなかったので冷たい仕打ち。そこで家老が内緒で贈り物をしたところ、ガラッと変わったということもあったそうで、大石の言葉は間違いじゃない。

公正を旨とした渋沢栄一さんも

「ワシなら借金してでも贈ったよ」

「賄賂を認めるんですか」と言うと「必要悪だ」と、言っているほど。

上杉鷹山に倹約を勧めた細井平洲でさえ、国元の平島村（愛知）が、

「氷砂糖を製造するには、尾張藩の許可が必要です。どうしたらよろしいでしょうか」相談を受けるや、

「済んだ後の十両より、済まぬ先の三両が八寸釘ほど利き申し候。役人にちょくちょく心つけを渡しなさい」

と、説いている。事の成就のため必要という。今は役人への付け届けはアウトですからご注意を。わかっていても逮捕される人があとを断ちませんね。

当時慣例として町奉行へ、大名が江戸にいる時世話になった謝礼として、金品を贈っていたという記録も、大名の参勤交代出金帳の中に記載あり。大岡越前守も貰っていたんですかネ。イヤイヤ時代が違います。

元禄五年、鍛治橋の屋敷が類焼して、呉服橋に替え地を拝領し新邸を建築。この工事費二五五〇〇両を、実子綱憲が当主の十五万石上杉家が支出している。

「何を苦しんで端金の賄賂をむさぼる必要があろう」

と、海音寺潮五郎が書いています。

当時浅野家は幕府の定めた標準軍備の3倍以上の兵力を有していた。5万石級の大名の家来１５０名、ところが浅野家は３０８名の記録があり、当時大名は競って軍縮に走り、巷には浪人者が充満していた。その中で倹約して強力な軍備、人件費を維持するのは相当の覚悟が必要。

浪人者を雇って救済するのは素晴らしいことと、山鹿素行は称賛しているが、人件費のため吝嗇の浅野家ともいわれていたといいます。いい塩で裕福という説と相反するが、これも裏と表。

いよいよ殿中刃傷から仇討ち、吉良家の悲劇は次回のお楽しみ。パンパン